

平安鎌倉時代に於ける

「気分」の意味について

——「心地」^{ココロ}との意味關係を中心に——

栞 竹 民

一、はじめに

語の示す意味は各時代によつて差異が存する。更に同時代というものの、文章ジャンルによつてその異同をも見せる。小論で取り上げた「気分」はその一例であると考えられる。「気分のいい(わるい)」という表現は現代語ではよく用いられ、耳にするものである。「気分」は日常用語として使用されていると思われる。その意味の一つとして、「人間の生理的情緒の快(不快)を表わすものが有ると見られる。ところが、そういう「気分」は平安鎌倉時代に遡つては果して現代語の如く使用されるのか、さもなければ、如何なる語によつて代替されるのか、以下それを巡つて検討を施してみたい。

二、平安鎌倉時代に於ける「気分」の使用状況

意味を検討するために、それに先立って、平安鎌倉時代に於ける「気分」の使用状況を明らかにするのが有効であると思われる。尚、今回管見に及んだ奈良時代の文献からは「気分」の用例が確認されなかつたため、時代の上限が平安時代に止まるのである。平安鎌倉時代の「気分」の使用状況を究明するには、両時代の文献をその表

現内容、形式によつて文章ジャンルに分ち、精査する必要がある。したがつて、平安鎌倉時代の文献を次のような文章ジャンルに分けることができよう。

一、仮名文 1 物語、日記、隨筆 2 和歌

二、和化漢文 3 公卿日記 4 古文書、古往来 5 伝記、往生伝の

類 6 法令、史書 7 漢詩文

三、和漢混淆文 8 説話集 9 軍記物 10 紀行文の類

となる。右の文章ジャンルに基づいて、「気分」を調べてみると、平安鎌倉時代では、「気分」は仮名文には認められず、和化漢文と和漢混淆文のみ存するという使用上の文章ジャンルの差異を有することが明らかになる。各文章ジャンルの「気分」の使用状況は次の表一の示すが如し。

表 一

用例数	文 献		考察対象
	和 化 漢 文	和 化 漢 文	
2	小 右	記 記	気 分
1	春 中	記 記	
2	兵 右	記 記	
2	中 範	記 記	
4	勳 仲	記 記	
2	吾 妻	鏡	
1	鎌倉遺文(1-5)	所収	
2	大日本國法華經疏	記	
2	拾遺往生	伝	
18	和 漢 混 淆	文 文	
6	今 昔 物 語	集	
2	愚 管 抄	抄	
1	沙 石	集	
1	源 平 盛 衰	記	
10	源 平 盛 衰 計	計	

仮名文から「気分」の用例が確認されなかったのは「気分」が漢語であるという性格に起因するのではないかと判断される。「気分」が漢語であることは古辞書に載っている「気分」の字音よみからも、中国文献に「気分」という漢語が存することからも察知される。尚、古辞書といえ、**「文明本節用集」**より前の時代の古辞書には「気分」が認められなかったのである。古辞書に搭載されている「気分」を挙げてみれば、

文明本節用集

書言字考節用集

気色イキイロ 一分 (818 ⑦) 気分イキブン (肢體、気形第29冊③)

邦訳日葡辞書

Qion ヤブシ(気分) 心地 II Gochun nanto gozaruzo (語氣分何とござるぞ) あなたはからだ具合、あるいは、気分はいかかですか (493) とある。中国文献としては、

子夏問孔子曰商問易云生人及萬物鳥獸昆虫各有奇偶氣分不同易主天地以生萬物言氣各有分數不齊同 (四部叢刊子部「孔子家語」執轡35卷六) と挙げられる。仮名文は和語を中心とし、漢語の使用が最少限に限定されるという文章ジャンルの特色が存するため、「気分」のような漢語がそれに侵入しかねることになるであろう。それは、「今昔物語集」の「気分」の各巻の分布状況からも反映されてくる。「今昔物語集」に於ける「気分」の各巻の分布状況は次の表一のようになっている。

二	
表	卷数
気分	1
	2
1	3
	4
	5
	6
	7
	8
	9
	10
	11
	12
2	13
3	14
	15
	16
	17
	18
	19
	20
	22
	23
	24
	25
	26
	27
	28
	29
	30
	31

先学の研究に依れば、「今昔物語集」は巻一から巻二十まで漢文訓読調で、漢語が多用されているのに対して、それ以降の巻は和文調で、漢語の使用量の減少が見えるといわれている。表二の示すが如く、「気分」が漢文訓読調といわれる巻に使用されていることが明白となる。この事象は漢語たる「気分」が仮名文に現れ難きことの「一証」とも成り得よう。仮名文とは反対に、和化漢文は和化といえども、漢文を基調とし、漢語が使用されるのである。因って、和化漢文には漢語「気分」が用いられるのは然るべきことであろう。亦、漢文訓読語、和文語、記録語及び中世の俗語という類によって構成される和漢混濁文に「気分」が現れるのもその文章ジャンルの特徴に合致することであると思われる。

尚、表一の示す通り、今回管見に入つた文献から得られた「気分」の用例は決して多量であるとはいえないであろう。これはもちろん資料の制約によるところもあると思われる。但し、一方は平安鎌倉時代に於ける「気分」が現代語のように日常用語としてよく用いられていない点も認められるではないか。

右の考察を通して、平安鎌倉時代に於ける「気分」は漢語という素姓のため、使用上の文章ジャンルの異同が認定されることが明らかになった。亦、検出し得た用例数を見れば、平安鎌倉時代に於ける「気分」は決して日常多数使用の常用漢語とはいえないではないか。以下、平安鎌倉時代に於ける「気分」の意味を検討していく。

三、平安鎌倉時代に於ける「気分」の意味

前項では、平安鎌倉時代に於ける「気分」が各文章ジャンルでどのように使用されているか、その状況について考察してみた。この項では、両時代に於ける「気分」の意味を検討してみる。まず、和化漢文から検出し得た「気分」の意味について考えてみよう。尚、意味分析に際して、「気分」と共起する主体、述語、連体修飾語という構文要素を中心に、場面、文脈をも考慮するという方法を取る。「気分」と共起する構文要素に注目するのはその主体、述語、連体修飾語の如何によって「気分」の表わす意味内容に関与してくるためである。尚、此でいう連体修飾語とは「如何なるか」或いは「誰かの」ということを指すのである。以下、右の方法を以って、「気分」の意味を考えてみよう。

1 已剋許大殿從法性寺被歸二條第云々、大殿御心地案内問大納言、
報書云、未時許參入大殿、猶有邪氣気分之由傳承侍、臨暗爲重
朝臣從大殿來云、御心地不快、既有苦給、(小右記五25⑬)

場面としては大殿の病気の尋問となる。文中の「有邪氣気分」は大殿の御病気が物気の様子が有ると解される。「気分」は大納言が大殿參入の時に視覚で捕えられた大殿の邪気の様子を示す意味と思われる。それは「気分」と共起する物事存在を表わす「有」という述語から伺える。「気分」の連体修飾語が「邪氣」で、主体が「大殿」となっている。

2 今日一品宮御八講始云々、面痴至今聊許有気分、不見苦、昨日
彼是所申也、亦以鏡見之、如人々所申、兩種藥極有驗、可謂神異
(小右記六213⑦)

2 は一品宮の顔の病のことをいう場面である。文中の「聊許有気分」はその面痴即ち顔の病が今日に至っても聊か目に見える様子が残っていると解される。例2も例1と同様、「気分」が視覚で把握できる人間の生理的な不快を伴う様子を示すという意味とみられる。それは「気分」と共起する物事存在を表わす「有」という述語が一致していることから示唆される。「気分」の連体修飾語が「面痴」主体が「一品宮」となっている。

右の二例の「気分」は人間の生理上の非健康的な様子、有様という意味を示し、両方とも人間の視覚で捕え得る具象的意味特徴を持っていると考えられる。次の例をみよう。

3 聖人勸客僧早速還去。客僧歎言。頃日迷山不知方隅。身心病極
既忘行歩。況日影斜欲入夜冥。云何聖人強被勸去。聖人語。我
非有厭心。此処遠離人間気分。逕多年序。是故勸去。(大日本
國法華經驗記卷上11519上⑦)

文中の「気分」は聖人の住んでいる所が人間の俗臭を含めての様子(を離脱する)という意味を示すとみられる。例12と同じ具象的な意味特徴を有する。但し、「気分」と共起する連体修飾語は「人間」そのもので、12の例のように人間の生理上の非健康的なものと異なっている。

4 聖人親近住傍。誦法華經。以衣覆上。抱病人臥。依經威力聖人
気分。病惱除愈。(大日本國法華經驗記卷中6654上⑥)

聖人は病人を助ける場面である。文中の「気分」は聖人の持つている目に見えなく、人に感じさせ得るような気を表わすと思われる。そういう氣と法華經の威力に依って「病惱除愈」となったのである。4の「気分」は123の例と異なつて、視覚で把握できない聖人の

根源なる氣を示し、抽象的な意味特徴を持つのである。

5 從遍身薰可愛之異香、非如世間所有沈檀麝香等、凡不可思議妙香也、
芳復之氣分極滋深、如瀟瀟室烟氣等也。

(鎌倉遺文三高山寺明恵上人行狀別記266上⑧)

場面は上人の「明神降身」をいうのである。文中の「氣分」はそれと共に起する述語「滋深」と香りを示す連体修飾語「芳復」とを合せて考えれば、「明神降身」によって、上人の身体から発散してくる香氣を示すとみられる。5の「氣分」は右の四例と違って、嗅覚で把握する上人の氣味を示す。

右の考察を通じて、「氣分」の意味を次のように記述できよう。

一、人間の生理上の非健康的な様子、有様

二、俗臭をも含めての人間の氣味

三、宗教的な人間の氣味

四、宗教的な人間の根源なる氣

と四つに大別できる。それに基づいて、他の和化漢文の文献に於ける「氣分」を同じ方法で検討して、その意味を分類すれば、次の表

三の通りになる。

考察対象		文獻		氣		分	
意味	健康な様子、有様	人間の生理上の非健康な様子、有様	二) 俗臭をも含めての人間の氣味	三) 宗教的な人間の氣味	四) 宗教的な人間の根源なる氣	計	
記	右	小	2				
記	春	1					
記	中	2					
記	兵	2					
記	勸	4					
鏡	妻	2					
文	鎌倉遺文(1-5)			1			
法	日本經				1		
記	大華拾遺					2	
計							15
				1			
					1		
						1	

表三の示すように、平安鎌倉時代の和化漢文に於ける「氣分」は一人の人間の生理上の非健康的な様子、有様を示す意味が圧倒的に多いことがわかる。一の意味は平安鎌倉時代の和化漢文の「氣分」の中心的意味となるともいえよう。一の意味を表わす「氣分」は視覚で把握できる具象の意味特徴を有している。それは「氣分」と共に起する述語の性質からも反映されてくる。その十五例の述語は物事の存在を示す意味の「有」或いは敬語の「御、御座」或いは否定形「無」からなるのが十四例で、物事の状態を示す形容詞「火急」が一例である。具象の意味特徴を持つ「氣分」はそういうような述語と共に起しやすいためである。換言すれば、具象の意味特徴の「氣分」がそういう述語を要求するのである。二の意味も一と同じ具象の意味特徴を持つと考えられる。両者の用例数からわかるように、平安鎌倉時代の和化漢文に於ける「氣分」は具象の意味を中心に、使用されているとみられる。

以上の考察で、平安鎌倉時代の和化漢文では、「氣分」は現代語の「人間の生理的情緒」という内面的意味を示すのではなく、「人間の生理上の非健康的な様子、有様」などの具象の意味を中心に用いられることが明らかになった。さて、平安鎌倉時代の和化漢文に於いては、「氣分」が現代語のように「人間の生理的情緒」という内面的意味を表わさないことよって生じてくるその意味分野の空白は如何なる語によつて補足されているのか、次項で、それについて検討を進める。

四、平安鎌倉時代の和化漢文に於ける「心地」の意味

前項において、平安鎌倉時代の和化漢文に於ける「氣分」の意味

に關して検討してみたところ、「氣分」は現代語の如く「人間の生理的情緒」という内面的意味を確認できないことが明らかになった。それでは、その「氣分」の不在によって發生してくるその意味分野の空白がどんな語によって分担されているのか、以下、それを解明するために、「心地」の意味を検討する。尚、「心地」を「こちち」と訓むことにする。つまり「心地」は和語の「こちち」の漢字表記であると判断される。「心地」は和化漢文に混入する和語の一つであるとみられる。「心地」の意味分析の方法は「氣分」と同様である。「心地」の用例は各文献によく現れているため、此では、「御堂関白記」の用例を中心に、「心地」の意味を検討する。尚、「御堂関白記」の資料性については先学の研究²⁾によって詳述されているため、付言しないことにする。次の「心地」の例をみてみよう。

一十八日、丙辰、賭^博、依咳病不參、三度云々、一度右勝、二・三度左勝云々、不參右大将、(略)二十日、戊午、參大内、差左丈座、有召參上、召硯等、有叙位事、随仰書了、入宮奏聞、退下奏宣命草、(略)未事了前退出、依不心地宜也、子時、卷上²⁷⑦文中の「不心地宜」は十八日の「咳病」が二十日になってもまだ癒えていないことに依ると思われる。その上、多忙の政務に追われて、道長は生理的情緒が宜しくないことになる。現代語でいえば「氣分がよくない」という意味を示す。「心地」は道長の生理的情緒を表わすと考えられる。それは「心地」と共起する物の属性を表わす形容詞の述語「宜」の意味からも示唆される。

- 2 (二日) 依上重惱給、渡給、其後渡法興院、上達部十四人被來、入夜參内、是無便事也、然而爲違方忌、依日来候也、三日、乙巳、天氣猶陰、爲職從一條通消息、老者御心地從昨日重者、從

晝雨下、(略)午時參還、老者御心地尚重、(卷下67⑤)文中の「心地」は(二日)の「重惱」と「心地」と共起する述語、「重」を合せて考えると、道長の義母である穆子の病氣(或いは病状)を示すと思われる。つまり穆子の御病氣が「昨日」、「晝」より重くなったのである。

3 奏了退出、次立文臺於庭中、須召文人後早立、而舞間不立之、此間東泉渡殿三后有御対面、見者感悦多端、姫宮同御、母々、女三位同參候、我心不覚有生者也、難盡言語、未曾有事也、(卷下¹⁸²⑤)

場面は寛仁二年十月廿二日に三后となった道長の三人娘の対面をいうのである。「心地」は12の例と異なつて、「咳病」「重惱」という人間の非健康的な素材がない文脈に現れている。むしろ道長が一成功者としての心境を告白する文脈と判断される。それは「難盡言語未曾有事也」という後接文からも示唆される。「心地」は道長が「難盡言語未曾有事」という三人娘の三后となつた一族の榮華に「有生」と覚えないほどの心の状態を示す。道長の成功者としての氣持は同じ寛仁二年十月十六日つまり3の例より六日の前に、娘威士立后本宮儀に於いて道長の詠じた和歌からも察知されてくる。

此世を是我世とぞ思望月の虧たる事も無と思へは、(小右記55⑤)人間の心の状態を示す「心地」は「覚」という人間の心の働きを示す述語を要求するのである。

右の考察で、「心地」の意味を次のように記述することができる。

- 一、人間の病氣(或いは病状)
- 二、人間の生理的情緒
- 三、人間の心の状態

と三つに大別できる。一の意味を示す「心地」と共起する述語は「重」「惱」を中心に用いられる。一方、二の意味を示す「心地」と共起する述語も類型的な様相を見せる。つまり「宜」或いはその否定形「不宜」が多用されるのである。両者の意味の差異はその共起する述語の如何に關与する。更に「有、無」と共起して多用され

る「氣分」とも顕著な違いを呈している。その違いは、「心地」の内面的な状態性を示すという意味特徴と、「氣分」の具象的な様態性を示すという意味特徴に起因するものであると思われる。右の分類に基づいて、他の和化漢文の「心地」を同じ方法で検討して、その意味を分類すれば、表四の如くなる。

表 四

心		地		考察対象		意	味	文	獻	
計	三、人間の心の状態	二、人間の生理的情緒	一、人間の病氣(或いは病状)	小	右					
46		18	28	小	右			記		
5		2	3	權				記		
16	1	9	6	御	堂	閑	白	記		
14		5	9	左		經		記		
5		3	2	春				記		
66		22	44	水	左			記		
11		2	9	中	右			記		
2		1	1	帥				記		
1			1	後	二	條	師	通	記	
1			1	永		昌		記		
35		9	26	玉				葉		
3		1	2	台				記		
6		1	5	長		秋		記		
7			7	兵		範		記		
4		1	3	山		槐		記		
37		9	28	明		月		記		
2		1	1	勘		仲		記		
2	1		1	平	安	遺	文	所	取	
3	3			鎌倉遺文(1-5)所取						
1			1	大日本国法華經驗記						
1		1		後	拾	遺	往	生	伝	
1	1			園	城	寺	伝	記		
1			1	天	台	座	主	記		
270	6	85	179	合					計	

表四の示すように、平安鎌倉時代の和化漢文では、「心地」が「人間の生理的情緒」という意味を表わすことが明らかになる。したがって、平安鎌倉時代の和化漢文では、「氣分」の「人間の生理的情緒」という内面的意味を表わさないことよって生じてくるその意味分野の空白が「心地」によって補足されるといえよう。両者は相補って共存する。それは平安鎌倉時代の和化漢文では「氣分」の、「人間の生理的情緒」という内面的意味がまだ成立していないことを物語ることにもなる。次に「氣分」を見出すことができた和漢混濁文に於ける「氣分」の意味を検討してみよう。

五、和漢混濁文に於ける「氣分」の意味

表一の示す通り、今回調査したかぎりの和漢混濁文から「氣分」を八例のみ検出し得たのである。和化漢文より用例数は一層少ない。以下、その「氣分」の意味を、「今昔物語集」の用例を中心に検討してみたい。

1 聖人ノ云ク、「我レ、汝ヲ賦^ハフニ非ズ。此ノ所ハ、人間ノ氣分ヲ離テ、多ノ年ヲ経タリ。

この例は右に挙げた「大日本国法華經驗記」3の例を典拠とするも

のであると思われる。因つて、「気分」はそれと同じ俗臭をも含めての人間の様子を表わす。

帝王、后ト無限ク思ヒ傳テ樓ム程ニ、此レ后ノ本ノ氣分有テ、
サ許オカシ氣ニ、目出ク清氣ニ、寢入タル時ト、

場面は帝王が龍女を后として迎えた後のことをいうのである。「本ノ気分有テ」は後の龍女としての本来の姿、様子が有ることを示すとみられる。つまり、その前生の様子がまだ残っていることである。「気分」は具象的な意味を表わすため、物事ノ存在ヲ示ス述語「有」と共起しやすいためである。

右の考察で、「今昔物語集」に於ける「気分」の意味を記述すれば、

一、人間の俗臭、前生をも含めての様子、有様となる。それに基づいて残りの和漢混淆文の「気分」の意味を分析すれば、次のような用例が認められる。

3今ハ我国ハ神代ノ気分アルマジ、ヒトヘ二人ノ心タヴァシニテ
オトロヘンズラントオボシメシテ、(愚管抄15⑬)

「気分」と共起する述語「アル」と連体修飾語「神代」とを合せて考えると、「気分」は「神代」の様子、有様を表わす。12の例と違つて物事の様子という意味として用いられる。但し三例とも具象的な意味特徴を持っているのである。右の考察で明らかになつた意味を綜合すれば、

△物事や人間の俗臭、前生をも含めての様子、有様

と一つに記述できる。和漢混淆文に於ける「気分」は具象的な意味を示す。それは「気分」と共起する述語が物事ノ存在ヲ表わす「有」或いは否定形「無」の多用から示唆される。尚、和化漢文の「気分」と比較すれば、両者とも具象的な意味特徴を持つものの、和化漢文に於いては、「人間の生理上の非健康的様子、有様」という意味が「気分」の示す中心の意味として用いられる。一方、和漢混淆文に於いては、物事、人間そのものの様態という一意味を表わすのに「気分」が使用されている。文章ジャンルによつて両者の意味上の差異が認められる。「人間の生理上の非健康的様子、有様」を示す「気分」が表三の示すように、公卿日記に集中している。それは公卿日記の日常生活、政治活動等を克明に記録しているという写実的な性質に起因するものではないか。つまり、生理上の健康か非健康かは公卿としての記録者或いは被記録者にとつて重大な事で直接に政治活動に影響することになる。そこで生理上の非健康的な様子が注目され、その時の対応振りが詳細に記録されているのである。

右の考察によつて、和漢混淆文の「気分」も和化漢文のそれと同じ現代語の「人間の生理的情緒」という内面的意味を確認することができないことが明らかになつた。では、和漢混淆文では、「人間の生理的情緒」という内面的意味を示さない「気分」によつて生じてくるその意味分野の空白が如何なる語によつて補足されているのか、以下それを巡つて考えてみたい。

六、和漢混淆文に於ける「心地」の意味

和漢混淆文でも「気分」は具象的な意味を示すのみで、「人間の生理的情緒」という内面的意味を示さないことが前項の考察でわかつた。次にその「人間の生理的情緒」を表わす語を探るために、「心地」の意味を検討する。「今昔物語集」の「心地」を中心に、意味を分析してゆく。意味分析の方法は右と同様である。次の例をみよ

う。

1 女ノ云ク、「未ダ不習ザル心地ニカ、ル歳ヲ歩ヨリ歩テ足モ皆
腫リ。亦、還ラム道モ不思想ラス」 (卷五 50⑥)
文中の「心地」は女の歩き慣れないという心の状態を示す意味とし
て用いられる。

2 曹司ニ行テ、心地極悪シケレ弱ラ臥ス、身甚ク成タリ。 (卷十四
336 ⑩)

「心地」と共起する述語「悪シ」と後接文「弱ラ臥ヌ」とを合せて
考えると、「心地」は(左大将)の生理的情緒(がわるい)を表わ
すとみられる。

3 姫君慕無ク病付テ、日来煩テ、心地大事ニ成ニケレバ、祈リ様々
ニシテ、父母歎ケレドモ、遂ニ失ニケレバ、 (卷三千二百②)

前接文「病付テ日来煩テ」と「心地」と共起する述語「大事ニ成ニ
ケレバ」とを共に考えれば、「心地」は(姫君の)病氣(或いは病
状)を示すと思われる。

右の意味分析でわかるように「心地」と共起する述語は「気分」
のような物事存在を示す「有、無」等と異なっている。これは両
者の意味の差異によるものであると考えられる。「心地」の意味を
記述すれば、

一、人間の病氣(或いは病状)

二、人間の生理的情緒

三、人間の心の状態

と三つに大別できる。それに基づいて今回調査したかぎりの他の和
漢混淆文の「心地」の意味を分類すれば、表五のようになる。

表五の示すが如く、和漢混淆文に於いても、和化漢文と同様、現代

表 五

心 三、人間の心の 状態	地 二、人間の生理 的情緒	一、人間の病氣 (或いは病状)	考察対象	
			意 味	文 献
61	32	5	今昔物語集	古本座抄
12	6	4	法華百寶	聞繪
1	1		打三寶	居物
2	1	1	閑寶	平家物語
4	1	2	延慶保元	平家物語
49	3	1	十平治	物語抄
1			平治	物語集
11			沙石	集
4			明惠上人	夢記
9	7	2	却癡閑	忘紀
28	8	4	東源	盛衰計
13			明惠上人	夢記
2			却癡閑	忘紀
7			東源	盛衰計
41	3	9	源平合	盛衰計
245	62	28		

語の「気分」の「人間の生理的情緒」という内面的意味が「心地」
によって分担されていることが明らかになる。いわば、その「気分」
の不在によって生じてくる「人間の生理的情緒」という意味分野の
空白が「心地」によって補足されるのである。和漢混淆文では「気
分」は具象的な意味特徴を有するのに対して、「心地」は内面的な
意味特徴を持つのである。和漢混淆文に於ける「気分」と「心地」
とは、和化漢文と同じ「心地」が「人間の生理的情緒」という現代
語の「気分」の示す意味を補う関係にあるとみられる。

以上、平安鎌倉時代に於ける「気分」の意味を巡って考察してみ
たところ、現代語の「気分」が示す「人間の生理的情緒」という内
面的意味が確認されなかった。では、そういう意味の「気分」は一
体何時代、如何なる文獻に出現してくるのか、それは今後の研究課

題の一つにしておきたい。但し、今回管見に入った和漢混淆文には、次のような例が見当つた。

重忠打物取ては鬼神と云共更に辭退申まじ、地體脚氣の者なる上に、此間馬にふられて、氣分をさし手あわらに覺え侍り、(有朋堂文庫本 源平盛衰記卷42 579⑨)

場面は屋島合戦で軍の占形として立てた扇を射るのである。重忠はその扇を射よと召されたが、「本々脚氣が有つてその上この間馬にふられた」という非健康的な体の状態になつてゐる。そういう非健康的な体の状態を示す前接文と「氣分」と共起する述語「覺」の示す意味とを考え合せると、「氣分」は重忠の生理的情緒を示すと思われるのが妥当ではないか。つまり以上の考察でわかるように、「氣分」が具象の意味を示すのみであるが、「源平盛衰記」では、「氣分」が現代語のように内面的意味を表わすようになってゐることである。尚、その意味変化は前時代に多用されてゐる「人間の生理上の非健康的な様子、有様」という意味を土台に、発生するのではないかと考えられる。今回調査した文献では、「人間の生理的情緒」という内面的意味を示すと思われる「氣分」は右に挙げた「源平盛衰記」の一例のみである。そこで、「氣分」の具象の意味から内面的意味に変化した時代、文献が明らかにになると判断されるのは甚だ不十分で、不安を禁じざるをえないのである。但し、「源平盛衰記」のような軍記物語という新しい文章ジャンルには、「氣分」の「人間の生理的情緒」という内面的意味が判然とされたことは注目に値すべきことではないか。「氣分」が「人間の生理的情緒」という内面的意味を発生させた時代、文献、要図等に関しては、今後一層資料を充足させることによってそれを究明するつもりである。

右の考察で平安鎌倉時代に於ける「氣分」の意味が明らかになつた。さてその「氣分」は何処に求められようか。つまりその出所は何処にあるのか。それを解明するには、中国文献の「氣分」の意味を検討する必要がある。以下、中国文献に於ける「氣分」の意味について考えてみよう。

七、中国文献に於ける「氣分」の意味

今回調査対象となる中国文献は日本文献の平安鎌倉時代と対照するために、宋の時代以前に限定することにしたのである。尚、中国文献をその表現内容、形式より散文、韻文、漢訳仏典という三つの文章ジャンルに分類してみた。その結果、「氣分」は三つの文章ジャンルから確認された。但しその用例数は六例しかなかったのである。それはいうまでもなく調査した文献の制約によるところもあるが、中国文献に於ける「氣分」は日本文献と同様、決して日常的に多用される語ではないともいえよう。次に今回管見に及んだ中国文献の中では、初出例と思われる例を提示してみよう。

1 子夏問于孔子曰商聞易云生人及萬物鳥獸昆虫各有奇偶氣分不同
易主天地以生萬物言受氣各有分數不齊同分扶反而凡人莫知其情
惟達道德者能原本焉(四部叢刊子部「孔子家語」執轡二十五卷68①)

「孔子家語」は孔子の談話、教訓及び門人と問対論議の語を集録するものである。例はまさに弟子である子夏が孔子と問対したものである。文中の「氣分」の意味に関しては、その後続する注によれば、「受氣各有分數不齊」つまり、生人、萬物の奇偶は各々受けた「氣の分量」が異なるということによると解される。「氣分」はその受けた「氣の分量」を示す意味と考えられる。「氣の分量」の「氣」

は中国古来の思想的な概念として、人間を含めての萬物を形成せしめる根源であるといった目に見えない抽象的な意味を示す。「氣分」はその「氣の分量」を表わすことになる。これは「氣分」という語の原義ではないかと思われる。つまり「氣」と「分」との二字がそれぞれ自身の意味機能を果しているとみられる。次の漢訳仏典の「氣分」の例をみよう。

2 七護心、心進安然保持不失十方如来氣分交接名護法心 (大正

新修大藏經首楞嚴疏注經卷八下¹⁵)

文中の疏注によれば、「寂照増進不動不退故云安然保持護持令此與佛冥然通合故云交接」と注してある。「氣分交接」は佛の「氣分」と冥然として通合することをいうと思われる。「氣分」と共起する「交接(冥然通合)」という述語の示す意味をも合せて考えれば、「氣分」は右の例1の「氣の分量」よりも寧ろ佛を成す根源である氣そのものを示すと思われる。つまり、佛を成す氣の分量ではなく、佛を形成せしめる氣自体を表わすのである。そういう佛の氣と冥然として通合することである。例1のように「氣」と「分」とが各自の意味機能を果す「氣分」となるが、例2の「氣分」は只「氣」という前部要素のみが意味機能をして、後部要素の「分」の意味機能が無くなっていくようである。但し両者は目に見えず、抽象の意味特徴を持つていることが一致するのである。

右の考察で、「氣分」の意味を記述すれば

一、人間を含めての萬物の根源なる氣の分量

二、佛を成す根源なる氣

と二つに分けられる。それに其づいて、残りの四例を検討してみたところ、いずれも右の分類と重なりと判断される。中国文献に於ける

「氣分」の意味を分類すれば、表六のようになる。

表		六	
一、佛を成す根源なる氣	萬物の根源なる氣の分量	考察対象	
		意	味
1	1	孔子	語家集
1	1	嵇康	籍集
2		首楞嚴	疏注
1		止觀	輔弘

表六の示すように、中国文献に於ける「氣分」はいずれも抽象的な意味を表わすことが明らかになった。その「氣分」の「氣」は中国古代の思想的概念として用いられ、抽象的で、目に見えない意味特徴を有する。しかし以上の考察で明白となったように、平安鎌倉時代に於ける「氣分」は目に見える具象的な意味が当同時代の中心の意味となつていく。両国語を比較すれば、両者の顯著な差異を見せてくる。特に、中国文献の「氣分」の原義と思われる一の意味は平安鎌倉時代の文献には認められなかった。但し一方「大日本国法華経験記」の「聖人氣分」の「氣分」は中国文献の「佛を成す根源なる氣」という二の意味と重なり、それを受容しているもののであると思われる。しかしながら、中心の意味となる具象の意味に対して、その用例数からもわかるように、そういう抽象の意味が周辺の意味となつていく。中国文献に於ける「氣分」は目に見えず、抽象的な意味特徴を持つていく。が、平安鎌倉時代に於ける「氣分」は目に見える、具象的な意味特徴が中心となつていく。右の比較で、

元來中国語出自の「氣分」は平安鎌倉時代において、中国語の二の意味を継承する一方、中国語の抽象的な意味から具象的な意味への変化が発生する。そのみならず、その具象的な意味が中心の意味となつていくことが明らかになる。

では、何故中国語の「氣分」は日本文献に伝わって、使用されているうちに意味変化が生じたのか、それは日本文献に於ける「氣」という語の表わす意味と関係するのではないかと判断される。即ち「氣」と「分」で構成された「氣分」は日本語での意味変化がその前部要素の「氣」によることであろうと考えられる。日本文献に於ける「氣」の意味については、昔の日本人の文学作品では、氣は人間を含めての天地万物のあらわれ方、動き方の微妙さを表現するところ⁽³⁾に用いられていたとるのが大きな誤りがなくてよいであろうと述べられている。つまり日本文献の「氣」は人間も含めての天地万物が現れる形態、様子を表わすという具象的な意味特徴を有すると理解される。「氣分」の「氣」はまさにそういう意味を表わすのであると思われる。それは、右の考察でわかるように、日本文献に受容された「氣分」が中国語の原義と思われる「氣」と「分」とが各々意味機能を成すのではなく、「分」の意味機能が無くなって、只「氣」のみの意味機能を果すものであるためであろう。平安鎌倉時代の「氣分」の具象的な意味変化の発生は日本文献の「氣」の具象的な意味特徴の反映であろう。但し、日本文献の人間をも含めての天地万物の形態、様子を示すという具象的な意味特徴を持つ「氣」は決して日本文献の独自のものではない。その本は中国語に求められるのである。たとえば「夫戦勇氣也、一鼓作氣」(左傳莊十年)、「我養浩然之氣」(孟子公孫丑上)、「湖南之士豪氣不除」(魏志陳登傳)

とある。「氣」は「様子、氣勢」等を示す具象的な意味として用いられる。しかしながら、以上の考察で明らかになったが如く、中国文献では、「氣」と「分」とで構成された「氣分」は「氣」の持っている具象的な意味を取らずに、「氣」の多義性を限定して、只「人間を含めての万物を形成せしめる根源なるもの一氣」という一意味のみを反映するのである。それに対して、平安鎌倉時代の「氣分」は中国語の意味を受容した上で、中国語のそれと異なつて、中国語から将来されてきた「氣」の具象的な意味をも附加させたのである。つまり、平安鎌倉時代の「氣分」は中国語と意味が異なつているのが「氣分」という語全体ではなく、その前部要素の「氣」という一字に起因するのではないかと思われる。

八、むすび

以上、平安鎌倉時代に於ける「氣分」を巡つて考察を施してみた。明らかになつた点を簡単に纏めてみれば、下記の通りとなる。「氣分」は漢語という素姓のため、平安鎌倉時代では和化漢文と和漢混淆文にのみ出現し、仮名文からは確認されなかつたという使用上の文章ジャンルの差が認められる。亦、和化漢文と和漢混淆文に於ける「氣分」は現代語と違つて、具象的な意味が中心となつている。現代語の「氣分」の「人間の生理的情緒」という内面的意味が「心地」という和語によつて分担されている。つまり、平安鎌倉時代に於いては、「氣分」の「人間の生理的情緒」という内面的意味がまだ成立していないともいえよう。それによつて生じてきたその意味分野の空白が「心地」によつて補足されている。更に、平安鎌倉時代に於ける「氣分」はその出自となる中国語の抽象的な意味を受容し

た一方、具象的意味変化が発生して、和化漢語となる。その意味変化の右方は元来の中国語の抽象的意味から具象的意味に拡大したとみられる。日本語に将来されてきた漢語は年月と共に様々な意味変化が予想されるが、「氣分」の意味変化はその一類型と成り得るのではないか。

最後に、今後資料を増やして、「氣分」の意味変化の時代、要因等を究明するのに努めたい。更に、「氣分」と類義関係を成すと思われる「氣色」「氣配」との意味関係を検討したいと思う。

〔注〕

(1)「心地」のよみについては、拙稿「延慶本平家物語」に於ける

漢字表記語のよみと意味について

——「心地」を中心に——(国文学攷 127号所収) 参照

(2)峰岸明著「平安時代古記録の国語学的研究」昭61・東京大学出版会

(3)三枝博音「日本文学における「氣」の研究」〔文学〕26—10昭33)

檢索文獻

(1)中国文獻

A 韻文

楚辭、毛詩(哈佛燕京学社引得)、嵇康集(嵇康集校注本)、阮籍集(阮籍集校注本)、陸機詩(陸士衡注本)、陶淵明詩文索引(淞江忠道編)、謝靈運詩(謝康樂詩注本)、謝宜城詩(万有文庫本)、全漢詩索引(松浦崇編)、王

臺新詠索引(小尾郊一・高志真夫編)、全漢三國晉南北朝詩上・下(丁福保編)、張籍歌詩(張籍詩集本)、杜詩(宋刻本)、陳子昂詩(陳子昂集本)、李賀詩(李長吉歌詩四卷)、温庭筠歌詩(四部備要本)、杜牧詩(樊川詩集注本)、王維詩(趙松谷本)、李白歌詩(繆本)、白氏文集歌詩索引

(2)日本文獻

(平岡武夫・今井清編、柳宗元歌集(宋世綵室本)、孟浩然詩(四部備要本)、韓愈歌詩(繆本)、何氏歷代詩話(艾文博主編)、漢詩大觀(井田書店)

B 散文

論語引得・孟子引得・春秋經傳引得・爾雅引得・周易引得・荀子引得

・墨子引得(以上哈佛燕京学社引得特刊)、禮記引得(哈佛燕京学社引得)、管子引得(中文研究資料中心研究資料叢書)、老子索引(豊島啓編)

莊子引得(弘道文化事業有限公司編)、國語索引(東方文化学院京都研究所編)、列子索引(山口義男編、儀禮・左傳・公羊傳・穀梁傳(以上十三經注疏)、山海經通檢(中法漢学研究所)、尚書(相臺本)、戰國策士

禮居仿宋本、論衡(四部叢刊本)、淮南子・呂氏春秋(四部叢刊本)、潜夫論(四部備要本)、曹植文集(法蘭西学院漢学研究所)、史記索引・漢書索引(二十四史索引之一、之二、黃福鑾編)、後漢書語彙集成上・中

・下(藤田至善編)、三國志及裴注綜合引得(哈佛燕京学社引得)、文選索引(斯波六郎編)、文心雕龍索引(岡村繁編、貞觀政要(貞觀政要定本)、宋史列傳儒林卷(中華書局)、世說新語索引(高橋清編)、朱子語類口語

語彙(塩見邦彦編)、資治通鑑(山名本)

C 漢訳佛典

法華經一字索引(付聞經二經(東洋哲学研究所編)、一切經音義索引(沼本

克明・池田證詩・原卓志編、古辞書音義集成19)、大正新修大藏經索引

D その他

偏文韻府(王雲五編)、辞源(商務印書館)、中文大辞典(中国文化研究所出版)

I 奈良時代語文獻

古京遺文(狩谷椽齋、統古京遺文(山田孝雄・香取秀真)、平城宮木簡

一・二、藤原宮木簡、寧楽遺文上・中・下、大日本古文書(正倉院古文書二一十五)、東大寺文書、法華義疏(伝聖徳太子筆)、万葉集(岩波

日本古典文学大系)、古事記(岩波日本思想大系)、日本書紀(岩波日本

古典文学大系、懷風藻（岩波日本古典文学大系、風土記漢字索引（植垣節也編））

II 平安鎌倉時代語文獻

A 仮名文

竹取物語・伊勢物語・土左日記・平中物語・大和物語・落窪物語・枕草子・源氏物語・和泉式部日記・紫式部日記・夜の寝覚、狭衣物語、（以上、岩波日本古典文学大系）
新編かげろふ日記索引・宇津保物語本文と索引・大鏡の研究・栄花物語本文と索引・古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集・新古今和歌集・新勅撰和歌集・續古今和歌集（新編国歌大観第一卷）
B 和化漢文

文華秀麗集・菅家文章・菅家後集・日本靈異記（岩波日本古典文学大系）
遍照發揮性靈集・江都督納言顯文集（六地藏寺本）
本朝文粹（久遠寺本）
本朝統文集・朝野群載（増補国歌大系）
高山寺本表白集（高山寺資料叢書第二冊）
凌雲集・經国集・都氏文集・田氏家集・雜言奉和・粟田左府尚齒會詩・扶桑集・本朝麗藻・江吏部集・侍臣詩合・殿上詩合・本朝無題詩・法性閑白集（以上、群書類從第六輯）
三教指帰（天理図書館）
本朝文集（増補国歌大系）

日本三代実録・政事要略・類聚三代格・弘仁格・律令・令義解・延喜式・延喜交替式・貞觀交替式・延曆交替式・令集解・日本紀略・扶桑略紀・百練抄（以上新訂増補国歌大系）

貞信公記・九曆・小右記・御堂閑白記・左経記・春記・水左記・中右記・帥記・後二條師通記・永昌記・長秋記・玉葉・殿曆・猪狼閑白記・明月記・山槐記・勸仲記・康富記・白記・兵範記・花園天皇宸記・伏見天皇宸記（以上大日本古記録）
史料大成、吾妻鏡（増補国歌大系）
雲州往来（皇學記）
（以上大日本古記録）
中料大成、吾妻鏡（増補国歌大系）
雲州往来（皇學記）
（以上大日本古記録）
研究と索引・本文研究編、和泉往来（京都大学国語国文学資料叢書）
高山寺本古往来（高山寺資料叢書第二冊）
東山往来・菅承相往来・釈氏往来・十二月往来・貴嶺問答・尺素往来・雜筆往来・異制庭訓往来（以上、日本教科書大系往来編）
将門記（真福寺本）
勅誠社文庫Ⅷ 玉造小

町杜衰書（山内潤三・木村晟・朽尻武編輯）
日本往生極楽記・大日本国法華經驗記・続本朝往生伝・本朝神仙伝・拾遺往生伝・後拾遺往生伝・三外往生記・本朝新修往生伝（岩波日本思想大系）
浦島子伝・富士山記・続浦島子伝・新猿楽記・傀儡記・遊女記・狐媚記・暮年記（以上、群書類從第六輯）

C 和漢混淆文

今昔物語集・宇治拾遺物語・保元物語・平治物語（岩波日本古典文学大系）
発心集（発心集本文自立語索引・高尾稔・長嶋正久・清文堂）
海道記（尊経閣文庫本）
東関紀行（東関紀行本文及び総索引・江口正弘監修・笠間索引叢書61）
延慶本平家物語（勉誠社）
源平盛衰記（有朋堂文庫本）
沙石集（慶長十年古活字本）
勉誠社、古本説話集（古本説話集総索引・山内洋一郎・風間書房）
打聞集（打聞集の研究と総索引・東辻保和著・清文堂）
十訓抄（十訓抄本文と索引・泉基博編・笠間書院）
三宝絵詞（三宝絵詞自立語索引・馬淵和夫監修・中央大学国語研究会編）
三教指帰注（三教指帰注総索引及研究・築島裕・小林芳規・武蔵野書院）
方丈記（大福光寺本）
宝物集（書陵部藏）
古典保存会、法華百座聞書抄（法華百座聞書抄・小林芳規編）
武蔵野書院
閑居友（閑居友本文及び総索引・峰岸明・王朝文学研究会編）
明恵上人夢記・却癡忘記・光言句義釋聽集記（明恵上人資料第一）
高山寺資料叢書第七冊・東京大学出版会）

（注、引得、索引に依つて本文を調べた）

〔付記〕

本稿は、平成二年度国語学会中国四国支部第三十五回大会に於いて口頭で発表したものをもとに、加筆したものです。席上、貴重な御助言を賜りました諸先生方に記して御礼申し上げます。亦、論を成すに当り、小林芳規先生、筆山敏昭先生には終始暖い御指導を賜りました。衷心より感謝申し上げます。

—— 本学大学院博士課程後期在学 ——